

総評 2023年5月分 杉本真維子

「春の坂のぼればのぼるだけ伸びる」立花ぼとん（東京都）
ぐにやりとした終わりのない坂のだるさが、春にうすあかりを灯すようです。

「重なった雲が競って叫ぶこと／雨の総てで教わる崖路」うろ仔（北海道）
雨雲が不穏なものであることをようやく思い出した気がします。

「夕闇に尫犬に似た猪が／川縁の土手東へ走る」貴田雄介（熊本県）
似たものもつ怪しげな魅力が夕闇とよく溶け合っています。表記にもふしぎな魅力があります。

「恋をして／どうにもならなくなったとき／突如現るヘブライ語教室」真島しましま（千葉県）
理解不能なものとしての「ヘブライ語」が恋の難しさをおおらかに受けとめてくれています。

「糾うという意を知らず／禍福とは／空より降りてくる紙のよう」からすまゐ（神奈川県）
禍福が縄のように交互にやってくると知っていればそれなりの心構えができます。しかし、「空より降りてくる紙」では準備のしようがなく、恐れるばかりになってしまいます。意味を知っていることと知らないこととではこれほどまでに大きな違いがあることを教えています。意味に対する真摯な態度が光ります。

「風薫る神社ペンだごと願う」日下部友奏（群馬県）
他力と自力が拍手のようにながちりと出合っています。神仏の力に与れるのはペンだごができるほど努力した者である、ということを作品が語っています。

「自治会の会長による獅子舞を／見るという時間の使い方」松下誠一（東京都）
「自治会の会長による獅子舞」とそれを見ているであろう人たちのあいだに漂う空気が、なんともシュールです。人を黙らせる力のようなものはなんらかの限界点を越えると、笑いとなって漏れ出してくるのかもしれない。

「熱帯夜テレビつけたらホームラン」小林紅石（埼玉県）
熱帯夜、テレビ、ホームラン。昭和世代にとってはこの三つのワードだけでほぼ自動的に喚起される光景があります。あと、ビール、お父さん、などですね。これが戯画的イメージではなく、リアルなのですから、改めて驚いてしまいます。

「まだたましいに／ならないところがかゆい」こはくいろ（大阪府）
輪郭が曖昧で捉えがたくてもどかしいもの。でもたしかにそこにあるもの。「かゆみ」というもののありようが「たましい」のありようをうまく語っています。

「脱皮なんてしなればよかった」涼木和貴（北海道）
ユーモラスにも、悲壮的にも、どちらにも受け取れる印象です。人間に置き換えたら、成長

なんてしなければよかった、という感じでしょうか。言葉でやり直すことができる分、人間のほうがまだ少し悲壮感が抑えられる気がします。

「人をまだ／諦めないでいる／油彩絵の具で汚す服」桜望子（山形県）
服を汚したことをばねにして、もう一度世界と関わろうとしています。言葉の繰り出し方が巧みです。

「指にかみついて しかられた。／ボクはいつもそいつの／背後を狙ってた」五代康成（埼玉県）

「指にかみついて しかられた」主体の「ボク」と、かみつかれた「そいつ」との関係性が豊かな読みを呼び入れそうです。同一人物として読めるとき、詩は円環となってまわりはじめるようです。

「風死んで不動のテトラポットたち」有野水都（東京都）
風が死ぬならば生物もほぼ生きていないだろうと予測されます。不動のテトラポットだけが無情に存在し、河川敷の苛烈さを物語っています。

次回も投稿を楽しみにお待ちしております。